

# トマト

## 暁夏

私の父は、酒乱でした。

父は、酒を飲むと、最初の三、四杯くらいまでは、機嫌がいいのですが、それ以上になると、不満を口にするようになり、酒がすすむにつれ、ささいなことで怒りだし、

「もう、このくらいにしておいたら？」と、母が言うと、さらに怒りだし、手近にあったビールびんや、コップ、醤油さしや入れ物などを投げて暴れました。

私は、手をだされたことはありませんが（二階の自分の部屋か、階段、廊下などに、妹といっしょに逃げていました）、母は、暴力を受け、父の投げた醤油さしが、ひたいにあたり、ひたいが切れたこともありました。

嫌な思い出です。嫌なことなので、心の奥深く、封じこめ、鍵をかけていた思い出です。それが、パート先で、カラフルなミニトマトを盛る器が、乱反射するガラスのようなプラスチックでできているのを見て、あざやかにその光景が浮かびあがりました。割れるガラス、フローリングの床にドクドクとこぼれる赤黒い醤油の液体、父が、今まさに割ろうとつきだしたビールびんの、茶色い輝き。

目を閉じて、心よ、石になれ、と、何度も願った日々。心は、少し硬くなって、私は、妙に大人びて、子供じみたおしゃべりをしない、おとなしい子供になったけれど、父がこわしたたくさんのガラスたちのように、心は熱を受けると、やわらかくとけだして、言葉を紡ぎだす。言葉は、ガラスの日々を、縫うように呼吸し、あたたかな今へ流れだす。今は、スーパーで野菜たちをきれいにカットしたトマトを、見ばえよく並べ、仕事終わりに、特売の野菜を買い物し、自転車の前かごに乗せて、軽快に家路へいそぐ。春の風に押され心はとけだして、言葉がころがってゆく。コロコロ、コロコロ、まるで、ミニトマトの行進のようだ。ガラスに盛られたトマトのように、私は、今、幸せだ。